

○江崎通彦 (朝日大経営)

1. 従来のプロジェクト (計画) 管理に不足していた手法のニーズ

従来のプロジェクト (計画) 管理の方法において、「まだ確立されていない手法についてのニーズ」があった。その主要なものを上げると次のようになる。(図1の左側に示す)

図1 従来の計画 (プロジェクト) 管理の方法で不足していた手法のニーズ

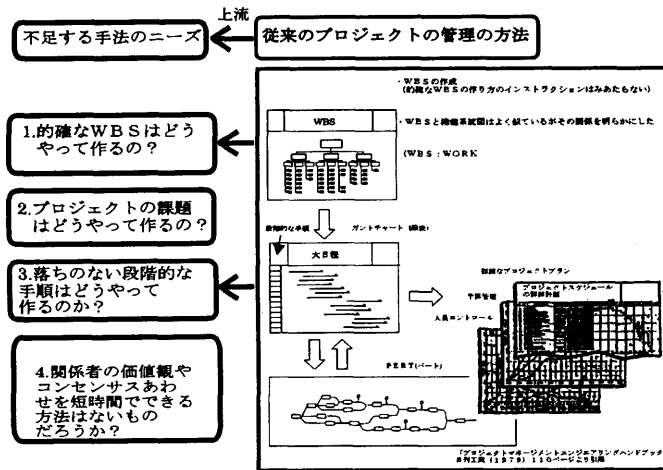
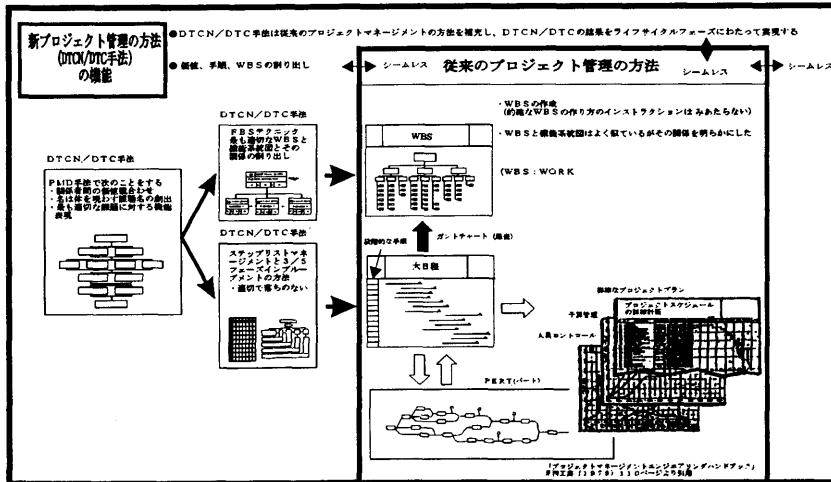


図2 「新プロジェクト管理の方法」による従来不足していた手法に対する基本的充足。

「新プロジェクト管理の方法 (DTCN/DTC手法) は従来の計画 (プロジェクト) 管理の方法と連結し それらを補完する



- (1) 的確なWBS (Work Breakdown Structure)は、どうやって創るのか？
- (2) 名は体を表わすといわれるが、最も「的確なプロジェクト名」をどうやって創出もしくは抽出すればよいのか？
- (3) 全体のスケジュール線表を作る前に、そのもととなる「落ちのない段階的手順」をどのようにして創るのか？
- (4) 上記(1)(2)(3)の前に必要となる関係者のそのプロジェクトに対するコンセンサス合わせはどのようにすればよいのか？

といったものがあつた。図1には、その不足する手法ニーズの概要で示し、図2には、その不足していた手法の「新プロジェクト管理の方法」による基本的充足の要点構造図を示す。

特に、黒い太い矢印のところがある特徴となる。

図3. においては、従来のプロジェクト管理の手法の中で問題とされていた、更に詳細な問題項目を新プロジェクト管理の方法の中のどの手法とどの手法で解決できるようになったかの一覧表を示す。

図3 従来のプロジェクト管理の手法の中で、問題として残されていた更に詳細な問題項目を「新プロジェクト管理の方法」のうちのどの方法とどの方法で解決できるようになったかを示す一覧表

従来のプロジェクト(計画)管理の方法での問題点として残されていた手法上の問題	差の情報による意思決定のメカニズム											
	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	
1 全体のスケジュール(ガントチャート/線表)を作る前に必要な、目的に応じた落ちのない「段階的手順を創る手法」がない		○		○	○							○
2 「何」で目的を効果的、効率的に実現するかの「もの/システムの構造」をコンパクトに示すWBS (Work Breakdown Structure) をどのようにして創り出すかの考え方とその手順がない	○	○				○						
3 上記に加え、プロジェクトをスタートさせる前に、関係者の価値の方向合わせで目に見えるような形で示す方法がない。	○	○	○	○	○	○	○	○			○	
4 プロジェクト中に存在する科学、技術、経済(コスト)を目的に合わせ結合させ管理する有効な方法がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
5 いままで独立に開発されてきた有効な手法、即ち、I E、V E、Q C、N M、K J、Q F D、S S Mなどの手法をそれぞれの特徴に合わせ、何のため、必要に応じてどのような位置づけで使えばよいかを総合的に割り付ける方法がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6 意思決定のメカニズムが解明されていないので、意思決定をするためにはどのようなメカニズムを使えば良いかはずっきりしていない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7 以上の中で、創造的な試行とその創造の結果をどのように具体化するかの手順をつないだ手順がない(従来は、提案方式のみである)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
8 思考のプロセスには、「仮説設定 (Abduction)」「検証」「評価」「意思決定」という段階があるが、これには過去事実の離散型と未来構造型の2つがあるが、それをどのような手法で使い分けるかを示した方法手順がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
9 男性に多い発想パターンと女性に多い発想パターンが図の形で説明されたものがない			○									
10 従来のやり方を新しいやり方に、過去の責任追求なしに切り換える考え方とその方法がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11 上記の問題を解決しながら、幅の広い創造思考とその具体化をする統合化された方法がない	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

2. 新プロジェクト管理の方法の特徴

新プロジェクト管理の方法の基本的な「目的と手段の構造」は図4. の通であり、構造／構成を示すと図5の通りとなる。

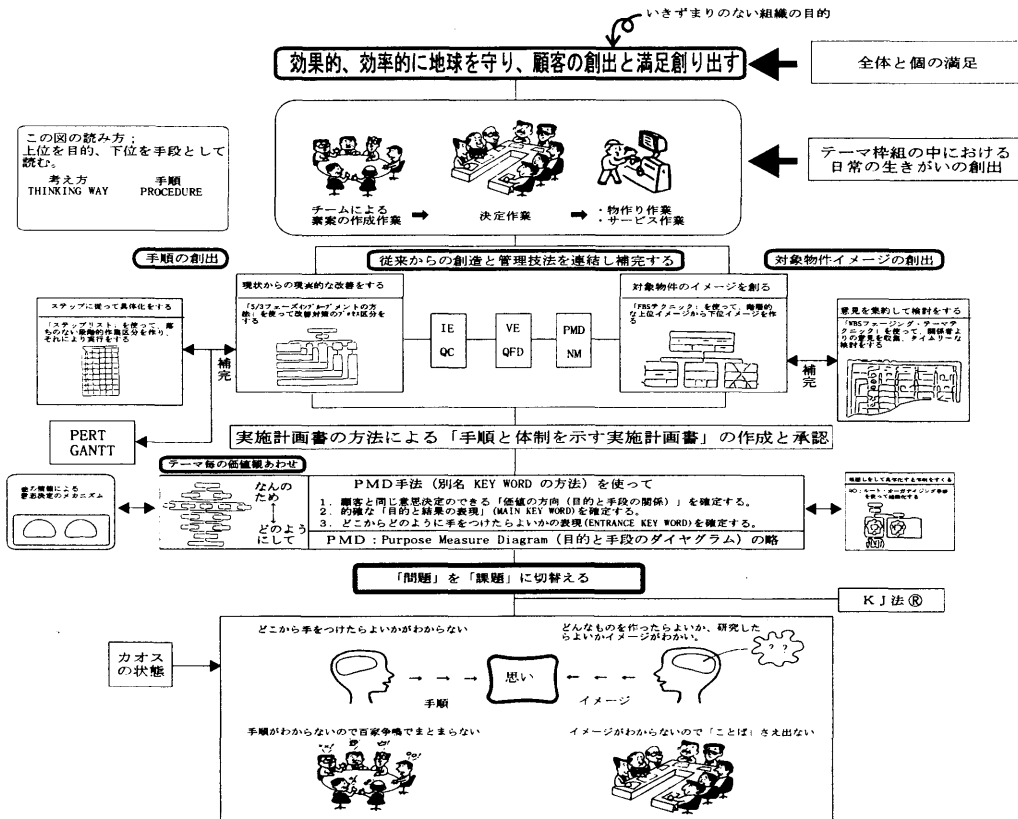
その特徴は、図4により説明すると

- (1) 従来の管理技法は、「対象物体のイメージアイデアの創出」（図の右側）に主力が置かれていたのに対し、新プロジェクト管理の方法は、それを作り出す手順とその出来上がったものを目的に対しどのようにして使うかの「手順の創出」（図の左側の上下の流れ）の方法に新しい手法を持っている。
- (2) この管理手法の最上位の目的を「地球を守り、顧客の創出と満足を創り出す」こととして、その組織の目的にいきさまりのないようにしている。
- (3) 上記の方法論に入るため（カオスの状態から脱出するため）まずはじめに「問題」を「課題」に切り換えるところからはいる。

図4の読み方は、上から下へは「…する」ため「…をする」の繰り返しの順序（目的と手段の順序）で読み、下から上へ読むには、「…をして」「…をする」という繰り返しの順序（おおよその手順の順序となっている）で読む。

新プロジェクト管理の方法の構成（1997年現在）詳細内容は、文献[1]による

図4 新プロジェクト管理の方法（DTCN/DTC手法）の目的と手段の関係



3. 新プロジェクト管理の方法への成長的過程

先に発表した「DTCN/DTC手法[2]（デザイン・ツー・コストとデザイン・ツー・カスタマーズニーズ）」からの関連から、「新プロジェクト管理の方法」への成長過程を示すと、図6の通りとなる。

4. 文献

- [1]江崎通彦「新プロジェクト管理の方法」(1997)アキ出版（問い合わせ先 03-351-8202（株）ダイレクト）
- [2]江崎通彦「デザインツーカスタマーズニーズの考え方とその手順」(1990)研究技術学会誌 VOL. 4-5

図6 どのようにしてDTC手法とDTCNの手順、新プロジェクト管理の方法が生まれ、成長をしようとしているか

